要領様式第２号

出張報告届

令和元年 8 月 19 日

吹田市議会議長様

会　派　名　自由民主党絆の会

出張者氏名　泉井　智弘　㊞

㊞

㊞

㊞

㊞

㊞

㊞

下記のとおり出張したので届け出ます。

記

出　張　先	秋田県秋田市・横手市		
期　　間	令和元年８月８日から８月９日まで２日間		
出張の成果	別紙のとおり		
備　　考	全国若手市議会議員の会　全国総会・全国研修会(東北) 8/8(木)　研修『学生の可能性を広げる進路選択支援などのキャリア開発について』 8/9(金)　研修『横手市まんが美術館について』	認印	会派代表者

吹田市議会事務局 1.8.19 受付

『視察・研修報告書』
令和元年８月８日
国際教養大学
講師：鈴木典比古・三栗谷俊明
内容：国際教養大学の取組について

先ず、学長である鈴木氏による大学の取組や特徴について下記の内容で講演があり、次に三栗谷氏による、今後求められる人材育成についての課題と教育について取組について講演。
◎ 高等教育財のグローバル生産軌跡
◎ 2020 年の高等教育主要国
◎ 2020 年の高等教育主要 5 か国
◎ 大学生の国際間移動
◎ MOOC s の世界
◎ 国際教養大学の基礎データ
◎ AIU のプログラムーダブルアセンブリーライン方式
◎ AIU が目指す国際教養教育
◎ リベラルアーツ教育は双方向にならざるを得ない
◎ 数字で見る国際教養大学

『大学生の就職活動の現状と課題』

・2025 年に society5.0 の社会を実現しようと国が進めている過程において大学に対応できる学生の育成を求めている。
・キャリアデザインを大学で教えているが、大学からで間に合うのかという事が懸念、さらに小、中、高の早い段階での教育が必要ではないか。
・現在社会（企業）において、求められている理系が背景にあり、殆どの大学が理系に特化しているが、未だに高校での三者面談で理系、文系の確認をしている。
・リベラルアーツでは広く浅く教える。専門性は大学院で。
・Society5.0 の時代に求められる人材育成を大学だけに求められているが、小中高に落とし込み、同時にやらないとかなり厳しい状況と考えている。
・親の課題　就職について本人より親の存在が大きくなっている。
・学校格差⇒学歴フィルターというソフトが存在する。
・学生の可能性を広げるために各大学がフィルターを外すために企業回りをしている
・経済格差⇒海外のフォーラムに行くお金がある方が有利。

・教員が子供の可能性をつぶす「あまり冒険しないでほしい」
・地方の子供達は何のために勉強をするのかを考えたときに行き詰っているのではないか。その結果として、学力が落ちてきている。
・地方では勉強の先が見えてこない。
そういった事から、当大学では、学生が地元の高校へ出向き学生自らが様々な取り組みを行っている。そして、学生のキャリアを広めるために、新しい大学だからこそできることをしていく、内部モニタリング、ファン（企業）を増やす、新しいことにチャレンジ、人間らしさを大切に、和魂多才を大切にし、イノベーションを起こせる人材育成に力を入れている。

まとめ)
以上のことから国の求める学生育成方針過程において、グローバル社会に対応した人材育成の課題が浮き彫りとなっている状況がうかがえる。
日本の高等学校までの教育では世界の学生との認識の差が顕著に表れている状況がある。
例えば安全保障や政治、宗教などのおいても大きな差が生じているなかで、グローバル社会に対応できる人材育成には、学生のこれまでの価値観や習慣（Liberate）から一旦自身を自由にし、その上で新しい自分を創っていくための学びや技芸(arts)の教育が必要。
しかし、それらを加速させ、Society5.0 の時代に求められる人材を確保するためには義務教育段階でのあり方についても検討する必要性があると感じる。
それらのことから、本市においてもグローバル社会に対応できる教育を進めるのであれば英語教育に併せ、コミュニケーション能力など人間性を高めるためのカリキュラムの検討が必要。
大学内視察としては市民も利用可能な２４時間開放されている図書館があり、様々な観点から学ぶ機会を提供している。

令和元年８月９日
横手市まんが美術館
内容：横手市まんが美術館の取組について

報告：横手市まんが美術館では現在約２０万の原画を収蔵し最終的には４０万部まで対応可能としている。
今では原画でのまんが作成がされていない為、それらを逆手に取る経営戦略をすすめ、日本の「まんが文化」において全国でも唯一となる施設にすることで地域発展に活かしている。
美術館では様々なまんがが展示されており、読書スペースもある。
本市においては、直接関係することではないが、これまで立地の良さから発展してきた本市において立地以外の魅力を見出すための戦略は人口減少時代においての必要性は否めないのではないかと感じるところである。